

インドシナ難民の日本人とのコミュニケーション

— 国際救援センター退所後1年未満のベトナム人の追跡調査 —

福留 伸子 増井 世紀子

要 旨

インドシナ難民に対する公的な日本語教育は、1979年に日本政府がボート・ピープルを「難民」と認定し受け入れた時から始まった。姫路定住促進センターで開始されて後、これまで大和定住促進センター（神奈川）、国際救援センター（東京）と全国三カ所で行われてきた。センターでの日本語学習等修了後、日本に定住している人々の数は約1万人に上り、主に関東や関西の各地で生活を営んでいる。

本調査は、国際救援センターを退所したベトナム難民を対象に、かれらの日本語でのコミュニケーションの実態を明らかにしようとしたものである。センターでの日本語及び日本事情理解のための教育は5ヶ月間で修了するが、その後1年未満の者9名を定住先に尋ね、面接中又は、職場でのプロトコルを録音し考察した。その結果、コミュニケーションに支障を生じさせる問題点が数多く認められた。日本語での意思疎通がある程度はかれるようになった者に特に認められた特徴としては、文脈に依存した会話の流れについてこれられないことや、第三者を含む表現での間違いや誤解が多いこと、事情事柄の説明が困難なことなどであった。

【キーワード】 インドシナ難民 コミュニケーション 実態 困難 誤解

The Status Qua of the Indo-Chinese Refugees' Communication Efficiency with the Japanese: after leaving International Refugee Assistance Center

Fukutome, Nobuko Masui, Sekiko

Japanese language education for Indo-Chinese refugees started when the Japanese government began to accept them officially in 1979. The present number of the Indo-Chinese refugees who have settled in Japan is about ten thousand. The purpose of this research is to investigate communication efficiency of Vietnamese refugees who have left International Refugee Assistance Center (in Tokyo) after finishing their five-month learning of Japanese language and customs.

We have visited nine of them who had settled down in Japan after leaving the center less than one year before and recorded their utterances during the interviews or at work. In this research we have found many problems with their communication skills. Some of them can not follow conversation which depends "too much" on the context and they often make a mistake or cause misunderstanding in expressions concerning third persons. They also have difficulty in explaining circumstances or situations.

1. はじめに

インドシナ難民の日本受け入れについて一言ふれておきたい。

1975年4月ベトナム戦争の終結後、5月にボート・ピープル9名が日本にはじめて上陸した。その後大量のインドシナ難民が流出し始め、これに対して日本政府も1979年以降インドシナ難民特別優遇措置をとってきた。即ち、インドシナから脱出してきた人々に限り、個別の審査抜きで「難民待遇」を与えることにしたのである。この他、直接日本へ来たボート・ピープル以外にも、東南アジアにある難民キャンプに滞留するインドシナ難民に対し面接調査をし、日本定住を希望する者で閣議了解された定住適格性が認められれば日本定住を許可するようにした。また、ベトナム難民の場合は「合法出国計画」によって、家族を故国から呼びよせ定住させることができるようになった。

この後、1989年からは、再び急増したベトナム人ボート・ピープルに対処すべくインドシナ難民国際会議によって採択された「包括的行動計画」の基に、難民性の審査を行うスクリーニング制度が導入され、難民として認定されなかったボート・ピープルには帰還を求められるようになった。

やがて、インドシナ三国の情勢が安定し、難民も安全に帰国できる状況が認められるようになったことから、1994年2月にはインドシナ難民国際会議で特別優遇措置の廃止が決まり、日本でもインドシナ難民の特別待遇廃止が閣議決定された。従ってこれ以降は、ボート・ピープルであっても「包括的行動計画」に基づくスクリーニング制度は適用されず、一般外国人の出入国と同じ「出入国管理及び難民認定法」と「国際的に受け入れられた慣行」によって取り扱われることとなった。これに伴い、長崎県大村に設置されていた難民一時レセプションセンターが閉鎖され、姫路の定住促進センターも閉じられ、いま開所している受け入れ施設としては東京都品川区の国際救援センターと神奈川県大和市の定住促進センターの二カ所となった。

今、入国してくる難民たちは、主に「合法出国計画」によって呼び寄せられた定住難民の家族たちや、海外キャンプに滞留している人々の中で日本定住を希望した人々である。こうして現在、日本に定住するようになったインドシナ難民の数は9,915人（1995年8月）⁽¹⁾にのぼる。今後は、地域に定住している難民に対する日本語教育や彼らの子女への母語教育に力が注がれる必要が出てくるであろう。

2. 調査研究の目的

本稿は、一時庇護施設を退所して1年未満の難民と日本人とのコミュニケーション状況の実態把握を通して、地域の定住難民の日本語教育の必要性和そのカリキュラム作成のための留意点を明らかにしようとするものである。

日本政府は、インドシナ難民を保護し、難民が我が国で自活することが可能になるよう、必要な日本語教育と生活指導を施し就職紹介を行うための一時庇護施設を設置してきた。1979年に兵庫県姫路市に、1980年に神奈川県大和市に定住促進センターを、そして1983年に東京に国際救援センターを開設した。これらの機関でインドシナ難民に対する日本語教育が4ヶ月、（開設当初は3ヶ月）

社会生活適応指導が1ヶ月間のサイクルで行われてきたのである。

国際救援センターでは、インドシナ難民に対する日本語教育を10年以上行っており、退所した彼らの日本語力の実態もセンターで行ったパイロット調査等で、近年わずかずつ明らかにされてきている。難民を雇用している事業所等の経営者らをセンターに招いて定期的に行われている雇用者懇談会では、日本語が通じなくて困るという雇用者からの声があがっている。又、「インドシナ難民定住状況調査報告」((財)アジア福祉教育財団難民事業本部, 1993)によると、定住難民の中からも日本語教育に対する要望が多く出ている。さらに、「日本に定住したインドシナ難民の母語の保持と喪失に関する研究」(岩見, 他, 1993)では、「日本語が相当上手になりたい」と思っているラオス・カンボジア難民が8割を占めていた。これらの調査や雇用者の声からもわかるように、定住難民の日本語によるコミュニケーション力はまだ十分とは言えず、更に日本語教育を受ける必要を感じているのは本人ばかりでなく、雇用者や周囲も同様である。

本論文は具体的に難民のコミュニケーション状況を観察し、その問題点を明らかにして、日本語教育現場で取り扱うべきカリキュラムの見直しと定住難民のための日本語教育の資料を提供することを目的とした。

3. 調査方法

3.1 調査対象者

調査対象者は、国際救援センターでの日本語教育及び社会生活指導を終了したベトナム難民9名である。彼らが、上記の国際救援センターで日本語教育及び社会生活指導を終了した後、退所してから1年以内を調査期間とした。即ち、1992年10月5日から1993年3月1日まで19週間(572時間)の日本語教育コースと、それに引き続き3月30日まで4週間の社会生活適応指導を受けた者の中から抽出した。被験者の経歴は様々で、国際救援センターへ入所するまで日本のキャンプ地で三年あまり過ごして来た者や、既に定住している家族の元で1年近く生活した後に救援センターへ入所した者など、センターで日本語教育を受ける以前に自習の機会をもった者もある。被験者を選ぶ際、調査者と既知の間柄で連絡がとりやすいと言う理由から、調査者が日本語教育を担当したことがある者で、年齢、日本語力の異なる者たち9名を選んだ。調査対象者のプロフィール(調査開始時)を以下に示す。

表1 被験者のプロフィール

被験者	A	B	C	D	E	F	G	H	I
年齢(才)	21	28	33	39	40	34	24	39	57
性別	女	男	男	男	女	男	女	男	女
就学年数(年)	12	12	10	12	12	7	9	11	1
滞日歴(月)	18	45	46	10	10	10	10	9	14
同居家族	友人	妻	妻・子1	妻	夫	妻・子2	夫・子2	なし	娘家族
日本語力 ⁽²⁾	Bレベルの ほぼ70%習得	Aレベル 100%達成	Aレベルの 約70%習得	Bレベルの ほぼ90%習得	Bレベルの ほぼ70%習得	C~Dレベルの 約50%習得	100%習得	Bレベルの 70%達成	ほとんど習得 できなかった。

3.2 自由面接法と職場でのプロトコル採取

調査の方法として、第一に、生活地で自由会話によるインタビュー実施をおこない、生活の様子・日本人とのコミュニケーション状況を聴取することとした。事前にインタビュー項目を設定しておき、それを自由な会話の流れの中で自然に聴取するようにした。日本語力の変化を捉えることも目的であったからインタビューは原則として日本語で行った。ほとんど日本語が通じなかったため親族による通訳を介した被験者も1名いた。インタビューは全時間録音（1回録音60分～90分）し、後に分析のため文字化した。

第二に、職場での会話を録音採取した。就業時間に調査者が職場に入り直接採取することは不可能なので、本人に就業中、録音器を携帯してもらい約3時間職場での会話を録音してもらった。事前に雇用者側の理解を文書で得ると同時に、直接依頼し了解が得られてから調査に入った。

調査日程としては、退所後3ヶ月毎に4回1年間を通して行うよう計画された。これは被験者の日本語能力の伸びとその変化を彼らの実生活の場で録音・観察することを目標としたものであった。しかし、実際には所期達成できずに今後の課題として残った。コース終了後3ヶ月経過してもセンター退所ができない被験者がいて、やむを得ずセンター内で面接調査を行い、コース終了後の日本語定着度を観ることとなったりした。彼らは、日本経済の不況を反映して就職先が得られずセンターを退所できなかったのである。また、調査者側が被験者に意図を十分に伝えられなかったためか、退所先を連絡することもなくいつの間にかセンターから退所してしまい、調査者が退所を知ってから定住先をつきとめ連絡をとるまでにかなり時間を要するということが起きた。更に、退所先はわかったものの、遠隔地のため調査者が出向くことに無理があり、データ採取を断念せざるを得なかったということもあった。

以下に実際行われた調査日程を記す。

表2 インタビュー及び職場でのプロトコル採取時期（月/日）

被験者	A	B	C	D	E	F	G	H	I
コース修了時	3/30	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
センター退所	7/08	5/18	5/18	8/09	8/09	8/09	8/09	5/12	4/02
1回目インタビュー	10/22	6/13	6/13	7/02	7/02	7/02	7/02	6/18	10/23
1回目職場録音	11/01	7/03	7/03	12/20	12/20			12/20	
2回目インタビュー	1/24	10/16	10/16	12/19	12/19	1/16	1/16		
	(’94)					(’94)			
2回目職場録音	1/24	10/16							
	(’94)								

4. 調査結果と考察

4.1 各被験者に見られたコミュニケーション上の支障とその他の観察

ここでは、録音テープで採取した発話を文字化し、調査者がテープを聞きながら、コミュニケーション上何らかの支障があると見られた箇所を抽出し、被験者別に整理する。彼らが実生活上かかえている日本語コミュニケーション力の問題を浮き彫りにすることが狙いである。この時、実際行われた会話をサンプルとしていくつかあげる。サンプルとしてあげられた実際会話は、紙幅の都合上、全体の流れの中から断片的に切り取ったために文脈がつかめず理解しにくくなっている部分があるので、() 内に、補足説明を施した。

また、インタビュー内容と職場でのプロトコル採取時の様子から、日本人との接触の機会や状態について観察できたことをまとめた。さらに、被験者によって特記すべきコミュニケーション・ストラテジーが見られた場合も言及した。

4.1.1 被験者Aの場合

全体的な印象としては日本人との会話に慣れており、簡単な意思疎通はよくできるし、会話の流れもスムーズであった。

<インタビューから>

①仕事の内容説明や、目の前にない状況の説明をしようとしたが、単語の羅列が多く文単位の話しができなかった。以下に具体的な談話数例をあげる。

1) 調査者「会社は何の会社？」

A 「検査の会社」

調査者「何を検査しますか」

A 「ある、せっけかいたら、ちよっとものある、しなもの、かたち、」....

「これ、コンピュータ、これ、部品、これ、図面みて、これ、かたち、いくら、コンピュータ.」

2) 調査者「女の人（事務員）がいるときは、女の人が電話とります？女の人がないときはAさん？」

A 「そう。わかりません、部長おねがいします。」（わからないとき、部長に頼みます）

②第三者との行為の授受の説明などがよくできなかった。

1) (ボランティアの日本語教室への案内の葉書をうけとったが、A自身には心当たりのない差出人からだったので不審に思い、それを部長に相談した時のことを説明しようとしている。)

A 「これ、ちよっとわかりません。部長、これ、どこ。部長、知らない。部長、これ電

話かけました」

「部長、どうして住所知っていますか。あたし、知らない。部長、信じられないで。あたしうそ、ほんとに、うそじゃない。」

2) 調査者「部長がAさん、お菓子かってきて（ということ）ありますか」

A 「ありません。部長、いつもお菓子もらいます」

調査者「Aさんが。ああそう、部長は食べないの？お菓子はたべるのAさん」

A 「食べます。1週間タバコを買いました。買います。タバコ、部長、たのむ」

③変化したことが、うまく伝えられない。

1) A 「(コンピュータ) むずかしい。いま、だんだん、おほえ....」

④意味は通じるが語彙が不適格

1) 調査者「あの人はどうして葉書をくれたの？」

A 「ちょっと知りません」

2) A 「もう、あります」

上司1「まだ、ある？」

⑤語順がベトナム語のままで不自然。

1) A 「部屋の、自分」→ (自分の部屋)

2) A 「10時半飲みます。お茶」→ (10時半に、お茶をのみます)

⑥推測したことが、うまくつたえられない。

1) 調査者「(Aさんは何もしないのに) 急に手紙がきました？」

A 「兄の□さん、おしえ、たぶん」→ (兄の□さんが、たぶん教えたんだと思います)

⑦発音上の問題で誤解を招くわかりにくさがあった。

1) A じゅはちにち=18にち?→にじゅうはちにち (28日)

2) おかやま=岡山?→おおかやま (大岡山)

<職場のプロトコルから>

①文法的には間違っていないが、社会的にみてより高いスピーチレベルで話すべきところでのみだけ表現を使っている。

1) A 「部長、金曜日、ここ、はいじゃないの」

上司2 「だから。また、わかんないこと言ってる。金曜日3つしかないから、これださなくていいかって言うから。」

2) 上司2 「ここへおいとくのか？」

A 「うん、あとで、もっていきます」

②発音上の問題

1) A 「〇〇さん、これヤギさんとエチとどちらがいいですか。」

上司1 「なに？もういちどいってごらん。」

A 「これ、いい？」

上司1 「わかんねえよ。」

A 「これ、ヤギさんと、エチ、エチ、オタさん。」

上司1 「なに？エスジーもってくかってことか？」

A 「うん」

2) A 「はい。しなもの同じ、も、エチどうしてちがいますか」

上司1 「エッチ？なんだ、エッチとは。エスジーか」

③指示を取り違えていたことを指摘され、弁明をするが婉曲な表現ができない。

1) 同僚1 「〇〇さんにもっていくように、って、ちがうの？」

A 「もう、きこえません。きこえなかった」

同僚1 「たぶん、そうだと思う。1枚だけ、1枚だけぬけてたのよ。ここ、これから。だから....」

④自分のミスを上司に指摘されたときに沈黙したままで、きちんとした対応が見られなかった。

1) 上司2 「これ、ちがうがや。これ。病院行ってこい、風邪ひいて具合が悪いからだよ、あんん？」

A 「(沈黙)」

<日本人との接触機会>

職場では、コンピュータにデータ入力をしたり、簡単な雑用を果たすことが期待されている。ざっくばらんな事務室の雰囲気の中で日本人同僚や上司と話す機会が多い。日本語学習のためにボランティア団体の所へ暫く通っていたこともある。

4.1.2 被験者Bの場合

全体的な印象では、大きな支障を感じることなく意思の疎通ができ、自分の方からも話題の転換をすることもある。日本語での会話がある程度楽しめる所までいっているといえる。

<インタビューから>

①第三者との間に起こった事柄を説明をする際、話がわかりにくくなる。

1) B 「最初は隣の人は、わたしたちね、外人だときいた、こわくなった、今は大丈夫です」

調査者「それは、となりの人に聞きました？ Bさんが思います？そう、思いましたか」

B 「見るようにわかる」

調査者「見た感じで」

B 「は、はじめは、どこ、ひっこしましたか。センターで、難民センターで。びっくりしました。」

調査者「ああ」

B 「あと、部屋にはいった。こまった」

②「～てもらう」や「もらう」の使い方が適切でないので、授受関係がわからなくなる。

1) B 「わたしたちね、1ヶ月仕事をしてもらいます。でも、たくさんの材料の名前はまだわからない」

2) B 「本当はわあしの家内の場合は（出産費用が）40万かかります。でも、センターの人は、話して、あと10万（にして）もらった。」

3) B 「いまは、現場行って、〇〇さんね、全部教えて（もらって）、あと、自分でやってもらいます。（あとは自分たちだけでやります）」

4) (妊娠した妻が検診のために病院へ行くときのこと)

B 「前ね、この病院、診療し、したいですが、でも、話ね、できなかった。わあし、紙で書いて、あと紙もらっていきました。」

調査者「誰が、紙にかいたの」

B 「わあし」

③「の」を過剰に、不適切に使用していた。

- 1) いつもちゅかっているの道具はすぐ覚えた。いつも使っての道具はすぐ覚える。
- 2) 小さい現場は仕事ないです。大きい現場ははいれなかった。
- 3) やれない仕事もある
- 4) 板金でやる仕事はできない。 他多数。

④音声的に問題がある語彙の発音が習慣化していた。

- 1) 「わあし」(「わたし」)
- 2) 「ちゅかっている」(「つかっている」)
- 3) 「ちゅうこがいがい」(「ちゅうかがい」)
- 4) 「スパー」(「スーパー」)

<職場のプロトコルから>

①指示通りのことができなかった。

1) 日本人「むごうの機械室へ行ってきて、びょうもってきてよ。これと同じ。エレベーターで
いって。」

B 「これと同じ?」(びょうをもってきてから)

日本人「こいつじゃ、ねえべ。これ、そとにあったやつだよ。機械室の中、機械室の中、中
のやつ。中、中、中にある、長い。これ、もってってやれよ。」

②部品の名前が正確に言えずに聞き返された。

日本人「ビョウ、ある?」

B 「ビョウ、ある。エッジない。エッジありますか。○さん、○さん、エッジありま
か。エッジ。」

日本人「は? レジンだろ、レ、レジン。はんたいだよ、レジン」

<日本人との接触機会>

仕事が現場での保温機械の設置等に関する作業で、部品の受渡しの合図や簡単な作業の指示だけ
に日本語使用が限られていて、日本語の使用は少ない。昼休み中に同僚の日本人と特に会話をする
親しさもみられない。職場の同僚一人を家に招いて、共に食事をしたりという積極的な面はある。

近所の人と挨拶程度はするが、交流はない。

4.1.3 被験者Cの場合

全体的な印象としては意思疎通に大きな障害はないが、文法的に不完全なところが目立ち流暢さ

に欠ける。

<インタビューから>

動詞の活用に間違いが多く、話がわかりにくい。

- 1) C 「それで、仕事のときは、日本人と話しことはありません」
- 2) C 「(職場での休憩時間に、日本人と話すことが) あります。でも少ないです。あの、みんな、日本人は話しことは全部ふつう体ですから、私たちは、きこ、きこ、きこえるのはゼロ。」

②第三者との間に交わした話の内容を伝えるときに、わかりにくい。

- 1) C 「わたしは、へやさん (おおや) に、話しました。」
調査者「そうですか」
C 「わたしは、あの、大家さんにあったから、すみません、あ、あなたはいま、ここアパートへ引っ越しますか、大家さんは、え、ちがうです、わたしは、大家さん。今、修理します。」
- 2) C 「(仕事を覚えるのは) たいへんです。しゃちよさん話したは、明るい人は、5年あとで一人で、ひとりまえになります。下手ひとは10年かかります」

③文の接続部分で前後の意味に関わりなく「～から」を使用しているのでわかりにくくなっている。

- 1) C 「すみません、○さんはいつ、いつから、部屋で帰るつもりですか。なんじ、あ、あしたは、かえますか」
 - 2) C 「はじめときは、ああ、しゃちよさんの子どもに、自分らが材料やりますから、ああ、わたしとBは見ます。見ましたから自分でやります。」
- 3) 調査者「日曜日は仕事に行かないで、あの、家で何をしますか」
C 「おそうじしましから、あ、手紙かきます。あ、何の物がありませんから、スーパーへ行きます (そうじをしてから手紙を書き、何もないのでスーパーへ行く)」

<職場のプロトコルから>

大体は、場所の移動の簡単な指示が日本人から出され、それに「はい」「いいえ」「おわった」「まだです」で答えるだけで、特に困った場面はみられなかった。Bと同一現場で作業をしているので、日本語がよくわかるBの方には多少複雑な指示が出されるが、Cに対する指示はほとんど一

語レベルで本人が理解できる程度のものに、日本人の方で制限していたと見られる。

①部品のやりとりをするとき、相手の言っている意味がわからずに機敏に対応できなかった。

1) C 「〇さん、まだですよ。ピョウ、ピョウがないですよ。」

日本人「んー？」

C 「ピョウ、おわ、おわった。」

日本人「むこうで、あまってんでしょ。むこうが。」(別の場所で作業をしている仲間にピョウをもらいに行くように指示をしたが、)

C 「はあ」

日本人「Cさん。・・・た？」(・・・部分は録音が聞き取れないが、「もらった?」)

C 「こちらが足りない」

<日本人との接触機会>

仕事はBと同じ、空気調節設備の簡単な取付け作業の現場で、言語の使用は少ない。部品の受渡しと簡単な作業、場所の移動の指示程度であった。近所の人とは挨拶をかわす程度で、特に交流はない。休日は買物にでかけるが、スーパー形式のところなので、必要な品物をかごに入れてレジにもっていけば日本語は使用しなくても用は足せる。

4.1.4 被験者Dの場合

文レベルで理解することができ、文レベルで話すことができるが、調査者の質問の意図を取り違えて、誤解して答えることが多く見られる。

<インタビューから>

①調査者の質問の意図を取り違えて、誤解して答える。

1) 調査者「最初にDさんがこの会社に来たとき、誰と会いましたか。社長さんと会いました？」

D 「うーん、私たちは行くとき、」

調査者「ここに来たとき、会社に来たとき。」

D 「会社に来たとき、」

調査者「ええ。」

D 「誰に？」

調査者「会いましたか。社長さん、課長さん、主任？」

D 「うーん、会社の社員みんなは親切ですから、」

調査者「ああ、そうですか。」

D 「私はみんなとあいます。」

2) 調査者「船橋の学校は、誰から聞きましたか。船橋の学校のこと、誰が教えましたか。」

D 「先生が、三人、教えています。」

調査者「どうして船橋の学校へ行きましたか。『ここに船橋の学校がありますよ』と言った人は誰ですか。」

D 「はい。」

調査者「例えば、Dさんが社長に『学校へ行きたいです』と言いましたか、それとも、社長さんがDさんに『船橋に学校がありますから、行きませんか』と。友達が教えてくれました?」

D 「今、私達はまだ、成田の学校、まだ話しますが、来年1月から話すつもりです。」

②日付や期間の言い方の間違いで誤解を与えた。

1) 調査者「Hさんはいつから、胃が、おなかが痛かったんですか。」

D 「11月8日から。」

調査者「病院へ行きました?」

D 「はい。入院は28日でした。(実際は28日間入院したというのが正しい)」

1) (Hがいつから働きはじめたかという調査者の質問に対して)

D 「11月25日から。」

調査者「仕事?」

D 「はい、また働いています。」

調査者「でも、退院が12月6日?」

D 「6日。」

調査者「12月?」

D 「12月6日。」

E(妻)「11月6日。」

D 「いいえ、違います。11日(月)6日。」

調査者「11月6日。入院は?」

D 「入院は、」

(実際は退院が12月6日で12月15日から働き始めている)

③調査者の説明に対して、「もうわかりました」で対応し、調査者に不快を与えた。

1) 調査者「8時から12時まで日本語を話しますか。」

D 「はい、もちろん、日本語を話します。」

調査者「どんな日本語ですか。その日本人が『Dさん、これ、して、あれ、して』」

D 「はい、もうわかりました。「何をしますか」「これは、そのまま、いいですか」(続く)」

④状況説明、理由説明、根拠の説明がよく分からないことがあった。

1) 調査者「どうですか、日本語。」

D 「ウー、まあまあです。じゅずにな、なりたいですが、ウー、センタを出て、待って、たくさん知ることが、心配しないです。から、勉強、少し、勉強します。」

2) D 「話すとき、私達は、話し、違うものがあります。が、彼らは直しません。」

調査者「直しません。」

D 「はい。例えば、何も、いつも、いっぱい、いっぱい、言葉は使います。人もいっぱい使います。鉄をいっぱい、いっぱい使います。何も、いっぱい言葉、使いません。」

⑤「くれる」が使えない。

1) 調査者「着る物とかは、買いますか。洋服とか。」

D 「友達があげました。たくさん、あげました。」

⑥語彙の言い直しが多く、聞きにくいことがある。

1) 調査者「どんな仕事ですか。」

D 「私は、会社の仕事は、自動車の、トラックの、自動車の、鉄骨、作ります。」

<職場のプロトコルから>

職場は鉄骨でトラックの土台、車を上下に駐車させるものなどを作る工場で、工場内は鉄骨の触れ合う音や機械の音が非常に大きいため対話相手の音声は録音テープから聞き取ることができなかった。調査者が目撃した限りでは指示は短く、時にはジェスチャーで行っていた。Dの発話は「あります」「これここに塗るの」「はい、あります」など短い文だけであった。

<観察されたコミュニケーションストラテジー>

適当な語彙がわからない時、英語や自らの造語での「言い換え」が見られる。

1) D 「遅い、our leave、英語で、our leave」

2) D 「彼らは時々、てご、話します。」

調査者「てご?」

D 「(手・語-ジェスチャー) てご、します。」

②理解できないときの「聞き返し」が見られる。

1) 調査者「誰とインタビューしましたか。面接?」

D 「面接？」

<日本人との接触機会>

会社の宿舎から職場まで日本人の車に同乗して往復しているが、ほとんど会話はしない。昼休みは同僚のインドネシア人や同国人同士で集まっているため、あまり日本人同僚との接触がなく、たまに「休みの日どこへ行くか」と聞かれる程度でほとんど会話がな。宿舎周辺には同僚のインドネシア人や同国人が住んでいてあまり日本人と接触する機会がない。日本語学習への意欲は盛んで、93年に3ヶ月位日本語学校に通ったが授業料が高いので中断。日本語能力試験4級の勉強をして受験した。また、日本語が分からないとき、職場の日本人に聞いたら「先生じゃない」と言われ、職場の日本人が日本語を直してくれないので不満を感じている。

4.1.5 被験者Eの場合

<インタビューから>

文を聞いて理解できる。日常語彙を使って発話できるが、単語レベルがほとんどで、文が終われないこともある。夫Dと一緒にインタビューしており、Eの発話回数は少ない。

①単語並べて文構成ができていない。

1) (高円寺の教会へいくかどうかという問いに対して)

E 「こう、こう、高円寺教会、私達、友達、日本人友達。」

2) E 「(日本語学校へ) はじめて、私、行きました。あと、遠いです。仕事、終わりました。
疲れました。アパート、料理、作り、」

調査者「1回だけ、行きました?」

E 「はい。アパート、自分で、勉強、」

②問いと答えがぐいちがっている。

1) (担当している仕事を何人でやっているかについて)

調査者「Eさんの仕事は?」

E 「会社の中に女の人、一人。」

③数詞の違い

1) 調査者「(センターの学習が修了後) 4月と5月、6月。社会の勉強しませんでしたか。」

E 「ああ、1月。」

調査者「1か月、3月だけね。1か月だけね。」

<職場のプロトコルから>

①職場は夫Dと同じ。工場内は鉄骨、機械の音が非常に大きいので、「反対です」「はい、いいです」などの短い文のやりとりしかない。上司の日本人に対しては、「です・ます」で話しており、特に、コミュニケーション上の支障は見られなかった。

②同僚のインドネシア人とのやり取りでは、「です・ます」と「普通体」が混ざっている。

- 1) E 「先生、先生言ってね。××さん（同僚）、顔日本人みたい。(笑い)」
同僚 「おれ、日本人みたい。」
E 「私一言って、お父さん、××さんのお父さん、日本人です。(笑い)」
- 2) E 「××さん、チェンジ仕事ね、今年します。手が痛い、痛い。ふふ。(機械音)」

<日本人との接触機会>

買い物の時に店の日本人と接する程度で、他には日本人と接触する状況もないようだ。同僚の同国人とインドネシア人との交流が主で、工場への往復時や休み時間には彼らと日本語を話すこともある。教会が近くにないので行けないため、日本人と接する機会は一層減っている。現在の仕事に対しては消極的で一人は故国でと同様に看護婦の職に就きたいと思っている一日本語学習にもそれほど積極的ではなく、夫の通った日本語学校も1度きりで止めている。

4.1.6 被験者Fの場合

調査者の質問の意味が理解できない場合が多かったので、質問するための語彙、表現をかなり制御しなければならなかった。また、Fよりは日本語がよくわかる妻がベトナム語で通訳する場面が多々みられた。

<インタビューから>

①語彙の記憶の仕方が不完全で不正確なため、多くの場合調査者が再確認しながら、会話を進めなければならなかった。

- 1) 調査者「こどもは日本語がじょうずですか」
F 「じょうずくないです」
調査者「そうですか。一日テレビをどのくらいみますか。何時間みますか」
F 「はちじ、くらい」
調査者「8じかん」
F 「あ、8じかん」
調査者「8じかん。ああ、たくさんみますね」
F 「たくさん、みます」

調査者「どういう番組をみますか。ニュースをみますか。うたをみますか」

F 「はい、うた、うた、こどもうた」

2) 調査者「あるいて何分くらいかかりましたか。何分くらいですか」

F 「にじっ、あー、20ぶんかかり....」

調査者「かかりました」

F 「かかりました」

調査者「5人いっしょに帰ってきましたか。帰りましたか」

F 「はい」

調査者「今は、もう、いきませんか。歯、ぜんぶ、治りましたか。歯、いたくないですか」

「あー、まだ」

調査者「まだ、痛いですか」

F 「いたい、いい、いたくないでした」

②語彙を並べるが、言いたいことがほとんどこちらに伝わらない。

1) F 「かまた、女の人。ご主人、に、に、マレーシアへきました。Fさん、あそび、」

調査者「ご主人、マレーシア？」

F 「センターきた。」

調査者「マレーシアからセンターへきた？」

F 「センターへきました」

③仕事に関する語彙が全くでてこないなので説明ができない。

1) 調査者「仕事は何をしますか。どんな仕事をしますか。」

F (妻とベトナム語で会話)

調査者「つくりますか？」

F 「あ、カード、カード、見る。何でもします。」

調査者「服の会社？」

F 「しの」

調査者「カード見る？カードに何か書きます。書いてありますか」

F 「んんー。日本語わからない、、、。はなします」

<不完全だが聞き返しのストラテジーを使用>

調査者「今度は、12時半から10時まで仕事をします。何時に起きますか、その時は」

F (妻とベトナム語で会話)

調査者「4時半に起きます？」

F (妻とベトナム語で会話「おき・・・」)

調査者「うん、何時に起きますか」

F 「もう一回話します。」

調査者「はい、12時から10時まで仕事をしますね。その日、朝何時に起きますか」

<日本人との接触機会>

職場では「おかあさん」と呼ばれる親切な女性従業員と日本語で話すことがあり、彼女の話し方はゆっくりなので理解しやすいそうだ。会社で日本語がわからないから叱られることもあって「淋しい」と話す。他には特に言葉をかわす日本人はいない。近所の人とは挨拶程度。

4.1.7 被験者Gの場合

<インタビューから>

夫Fと同時にインタビュー調査をしたので、Fが分からない場合、ベトナム語で通訳したり、夫に向けられた質問に対して横から答えるという場合が多々みられた。Fよりはややレベルが上であることがわかるが、習得語彙が少ないため、調査者からの質問内容が限られている。

①夫の仕事の内容について説明しようとしたが、語彙がわからないのでできなかった。

1) G 「先生、これ全部Fさん。」(断熱材の一部のような繊維を示しながら)

F 「ムシン、ムシン、わからない」

G 「先生、ちいさい」

調査者「これをたくさん作りますか」

F 「はい」

G 「これは、買いました」

調査者「会社はそれを作りますか」

G 「先生、いま、ここへひと、ひとつ、大きい、会社、小さい」

②救援センターでは既習の語彙だが、わからなくて質問に答えられなかった。

1) 調査者「いま、困ることありますか」

G 「こまる？」

調査者「trouble、もんだい」

G 「.....」

③単語並べだけで文構成できないのでわかりにくい。

1) 調査者「社適がおわってから、毎日何をしますか」

G 「しんばい、しごと、はたらきます」

2) 調査者「(家族) 4人で日本語話しますか。」

G 「先生、少し、話しました。テレビをみました。先生、○○、△△ (注：こどもの名前) 見て、魚、見て、キャッツ、見て、野菜」

3) 調査者「(テレビで) どんなのを見ますか。どんな番組を見ますか」

G 「ほいくしつ、先生、こども、ほいくしつ」

調査者「ほいくえん(?)」

G 「はい、ほいくえん」

調査者「こどもの?」

G 「はい、ほいくえん、こども」(センター内に「保育室」があり、幼児向け番組のこと)

調査者「を、見ます」 とをこう表現した)

G 「はい」

④日付が正しく発音できない場面が多数。

1) 調査者「いつ、みんなできましたか」

G 「はち、はちがつ」

調査者「八月なんにちですか」

G 「くが、せんせ」

調査者「九月?」

G 「こののか、こののか」

調査者「ああ、八月九日?」

2) 調査者「Gさんは、仕事しますか」

G 「しーが、しーが」

調査者「しました?」

G 「よんがあつ」

調査者「よんかげつ?」

G 「よんかげつ?同じ?先生?」

調査者「いま、しごとしますか」

G 「はい。しません。よんがつから」

調査者「4月から、しごとします。ああ、そう」

<日本人との接触機会>

毎日、家の中に子どもといる生活で、殆ど日本人とは接しない。夫のために薬を買いに薬局へ行ったことがあるが、その時は、センターから支給された辞書のみで紙に日本語で用件を書いてもっていった。近所の人と挨拶程度はする。

4.1.8 被験者Hの場合

語彙はある程度習得できているので簡単な意志疎通ははかれる。

<インタビューから>

①単語並べの発話で、意味はくみ取れるが文の組み立てができていない。

1) 調査者「どうですか、仕事、大変？」

H 「疲れ、疲れ、仕事、仕事、疲れになりました。毎日、毎日、仕事、重い」

2) 調査者「(仕事をするところは) ビルですか、普通のうち」

H 「うち、ビル、2階。うち、します、2階」

3) H 「電話、先生、私、楽しい、電話をもらいます。かけ、もらいます、かけにももらいます」

②質問されたこととそれに対する応答がかみ合っていない。聞かれたことの意味がよく理解できていないまま答えている。

1) 調査者「(職場の) 中国人も (日本語上手ですか)」

H 「まあまあ、少し」

調査者「Hさんは中国語、わかりますか」

H 「はい、わかります。」

調査者「中国語？」

H 「あ、わかりません」

2) 調査者「Hさんが今の会社に行きました。その前に、もうベトナム人いましたか」

H 「いま、まだ帰りません」

3) 調査者「いつ日本語を話しますか。社長と日本語を話しますか」

H 「少し」

調査者「少し。朝、話しますか」

H 「ベトナム語」

調査者「朝、ベトナム語？」

H 「友達、一緒に、仕事、はな、日本語、話しません。だけ、一人で、ああ....」

③発音が不正確でわからない

ブラジル（ブラジル）人

④日付が正確に言えない

1) H 「にじゅうにち、ああ、から、にじゅう、ああ、じゅうにちから、ああ、じゅうごまで、」

2) H 「私、センターを出る。12日、5か月」（5月12日の意）

<職場のプロトコルから>

発話機会がほとんどなく全てベトナム人の同僚との母語での会話であった。仕事は自動車の塗装を同国人と二人で黙々と行う作業であった。

4.1.9 被験者Iの場合

1993年10月に自宅でインタビューしたが挨拶以外の日本語は話せず、通訳（ここでは娘婿と孫の協力があつた）を介さなければコミュニケーションがとれなかった。

<インタビューから>

日本語を話したのは、調査者を見送りながら別れ際に言った「ありがとう」「さようなら」だけであった。

<日本人との接触機会>

娘の家族と雇用促進住宅に暮らしており、外出することが殆どない状態である。近所に買物にでることもなく、たまに団地の敷地内にある公園へ孫を遊びに連れていくが、日本人との会話は無い。家族が面倒を見ているので公的機関その他に自ら出向く必要もなく、これまで病院へかかったことも無い。家の中で家族とベトナム語だけを使って生活している。一人で留守番をしているときに電話がかかってくることがあるので、そのために対応できるよう家族が「わかりません、〇さんいません」という日本語をおしえたら、それは言えるようになった。家族の友人が来ると「こんにちは」、「さようなら」程度の挨拶はしている。

4.2 主要な問題点分析と今後の課題

彼らの日本語によるコミュニケーション力がまだ不十分であることは調査結果によって明らかで

ある。その原因は、習得語彙の不足及び語彙の不正確な記憶や、統語のための文法知識の不足と不完全な記憶によるものが大きい。ここでは、国際救援センターでの日本語教育終了時評価も参考に、被験者をレベル別に大きく4段階に分け、主に各レベルでの日本語習得に関する今後の課題を明らかにする。但し、被験者Iは、考察の対象から除いた。この被験者は国際救援センターでの4ヶ月間においてもほとんど日本語を習得できなかったし、退所後6ヶ月目の調査においてもあいさつ以外の日本語表現はなかった。また、家族の話からも本人は日本語を習得しようとする意欲も必要性も感じていないということなので、本稿で明らかにしようとしていることとは別の問題として、ここの考察対象からはずした。

レベル1 (F、G) の場合

彼らは、国際救援センターで日本語教育を受けていた時点よりもコミュニケーション能力の後退が見られるか、または現状維持にとどまっている。センターでの既習語彙であっても不正確な発音やウロ覚えになっているものもあり、退所してからは日本語に触れる機会が却って減少したため後退現象が出たと思われる。終了時点で習得できていた語彙が少なく、文単位でのコミュニケーションが困難である。調査者が聞いたことだけに対して「はい」、「いいえ」か又は1語での受け応えが殆どで、しかも、質問に使われた語彙の繰り返しによることが多い。

職場での音声採録はできなかったが、インタビューの中で新しく職場で使用し始めた道具の名前を言おうとした時、調査者らには日本語として理解できない音声であって、新たな語彙の獲得にまで至っていないと言える。作業現場でも日本語がわからないために非常に困難があると察せられる。

環境面では、会社の寮に他のベトナム人家族と共に入居しており、ベトナム人同僚が周囲に住んでいるため、毎日の生活の中で日本語に接する場面がほとんどない。緊急の場合「日本語テキスト日本の生活³⁾」から必要な日本語文を紙に書写し店頭でそれを提示しながら用件を足していると言う。また、日本語学習の必要性を感じながらも近くにそのための場がないことを訴えていた。

今後彼らが日本語によるコミュニケーション力をつけるためには、先ず生活に必要な最低限の語彙と表現をもう一度学び直す必要を感じた。そのため、ベトナム語で説明の入ったテープ教材等による支援が望まれる。また、生活の中心が職場であることから、仕事上でコミュニケーションをスムーズにはかれるよう、必要な語彙リストを作成したり、指示や応答の仕方などを書き留めて記憶するよう学習の方法を教えて励ますことも必要だと思われる。

レベル2 (E、H) の場合

国際救援センターでの時期と比較すると、日本人と話すことに慣れた様子で即応性が出てきたと言える。しかし、日常的語彙で既習のものは使えるが、単語並べだけの場合が多く文の組み立てがかなり困難である。理解面においては、一文を聞いて理解できても一問一答でないときに談話の流れが理解できず応答が食い違っていることがしばしばある。簡単な意志疎通ははかれるが、聞き手

の方に全く予備知識のない事情について説明したり、仕事の手順を話したりする場合に、通じさせることは困難である。更に、自分に不都合な状況が生じた場合それに対して自分を防衛したり、周囲に理解を求めることができなかつたことがベトナム人同僚の話からうかがえた。

今後彼らが日本語によるコミュニケーション力をつけるためには、基礎文法の復習と、会話の流れの中で日本語を学ぶことが必要だろう。また、自分の事情を説明して相手にわかってもらえるようにすることの重要性に気づかせ、日本語学習に対する意欲を引き出す必要も感ずる。

レベル3 (C, D) の場合

国際救援センターでの時期と比較すると、日常的な語彙はよく使えるようになっており、適当な語彙がみつからない時には自分で造語したり英語で置き換えたりもするようになった。しかし、問題点は多く、主に次の三点に絞れる。

- (1) 単文の組み立てはできていても、接続詞や活用の間違いが目立ち、流暢さに欠ける。
- (2) 第三者との間にあったやりとりについて説明できない。つまり、行為の授受関係が表現できない。
- (3) 会話の流れの中でしばしば文脈がつかめないうえに誤解をしたり、聞き手に誤解を与えることがある。被験者は、調査者がする質問に対して、話の前後の流れと関係なくそれが新たな質問であるかのように捉え、一文毎に回答しようとして間違いをおかす。これは、前に聞いたことを記憶の中にとどめておくことができないために起こる場合と、前に話したことが実はよく理解できていなかった、つまり談話の結束性を保っている統語的知識が欠如している場合とが考えられる。自然な話しことばの特徴として接続表現の省略、指示対象となるものの省略が行われたり、「場」に依存した表現（泉子・メイナード、1993）が出てくることから、日本語の談話の結束性についての文法的知識を欠いている被験者らにとって文脈を正確に捉える上で困難が生じていると考えられる。また、たまに「聞き返し」のストラテジーを使うこともあるが、話の内容が十分理解できないまま推測で答えようとする傾向も見られた。

今後彼らが日本語によるコミュニケーション力を更につけるためには、彼らの使用する日本語のどこがどのように間違っているのかを指摘して、正しい表現を教えることのできる人材が必要であろう。そして、既知の文法を正しい知識に整理し直すことだが、その過程で彼ら自身がモニターする力をもてるように、テレビやラジオのドラマを注意深く見て学ぶ方法も有効であると考えられる。

レベル4 (A, B) の場合

センターにいた時点よりは、即応性、流暢さが出てきており会話の流れがかなりスムーズである。単文、重文、複文もある程度使える。流れの中での文脈のとり違えはほとんどなかつた。但し、下記の問題点がないわけではない。

- (1) スピーチレベルを使い分ける待遇表現に混乱がある。
- (2) 第三者との交渉を説明するときに混乱が見られる。

これは一般的に日本語学習者にとってかなり習得しにくい内容の一つと言えよう。授受動詞や受け身など他者に対する動作または被動作を表す動詞を含む表現で適切な語彙が出てこないことや、助詞の間違った選択が多く見られる。筆者らはこれらをまとめて「対人動詞」と呼んでいるが、「対人動詞」にまつわる日本語の統語法とベトナム語の統語法との違いが習得を困難にしている大きな原因の一つであると考えられる。即ち、その日本語との著しい違いは、1. ベトナム語には、日本語の助詞に相当するものがなく語順によって主被もしくは授受関係が定められる。2. 動詞は活用せずに、時制やアスペクトは時を表す名詞や副詞で表現されるという点である。また日本語の「対人動詞」は視点がどこにあるかにより用法が異なるため、対話相手が使用する「対人動詞」をそのままの形で記憶することによっては第三者とのやりとりを適切に表現できるようにはならない。このため、実社会の中での習得が容易でないと予想される。

- (3) 聞き手と共有していない場の事情や事柄に関して説明するとき支障が起きる。例えば、聞き手にとって多少でも既知の事柄が話題となっている場合であれば、被験者の話す内容について不明瞭な所は確認したり、補ったりすることで説明が成功するが、全く情報のない事柄が話題になった場合は被験者の言語力のみが理解のための手段となるので、話の内容がかなりわかりにくくなる。これは、談話構成ができる程度にまで十分にセンターで学習する時間がなかったのでやむを得ない結果だとも言える。

今後彼らが日本語によるコミュニケーション力を更に向上させるために必要となるのは、語彙・統語的知識に加えて談話構成の知識である。談話構成の力をつけるためには、初級文法に加えて、結束性を示すための指示、省略、語句の繰り返し、接続の表現について知らなければならぬし、また、視点の問題についてもベトナム語文法と対比させながら学習することができれば効果的であろう。もう一つ忘れてならないのは、主被もしくは授受関係が正確に表現できなければ実際の被害を与えたり、被ったりしてトラブル発生の原因になる恐れがあることだ。従って、この「対人動詞」の意識的な学習は彼らにとって社会生活を円滑に営んでいく上での大切な課題だと言える。

5. 結び

実社会に住むことになった定住難民たちは実際には膨大な日本語の量を聞いている訳でもなければ、理解できるインプットが与えられる環境にもいないことがわかった。救援センターを退所する時点でレベル1～3にあった被験者らは、実社会に出ても、日本語で話すことに自信がないので自ら積極的にコミュニケーションをとることができない。Krashen (1983) が言っているように、言語習得のためには理解できるインプットが与えられなければならないとしたら、レベル1～3の被

験者にとって、実社会は決して学べる所とはなっていないだろう。彼らのレベルを遥かに上回る日本語に取り囲まれているからだ。かろうじてレベル4程度の人に伸びが見られたことがわかるだけである。異文化の中で生活する人々が内側に抱えている問題を言語学習だけで解決することは不可能であるが、せめて難民が日本社会に溶け込んで生きようとするとき、欠かすことができない日本語学習の機会が身近な場所で与えられるようになることを期待する。

最後に、本調査にあたり国際救援センター元講師伊藤恵子氏にご協力いただいたことを付言しておく。

注

(1) (財)アジア福祉教育財団 難民事業本部 (1995.8) 「インドシナ難民の我が国への定住状況 1995年8月31日現在」『ていじゅう』74:17

・本邦定住状況

区 分	ベトナム	ラオス	カンボジア	合 計
国内の一時滞在施設から	3,520人			3,520人
海外の難民キャンプから	1,800人	1,233人	1,210人	4,243人
政変前に入国した元留学生等	625人	73人	44人	742人
ベトナムからの合法的家族呼び寄せ (ODP)	1,410人			1,410人
計	7,355人	1,306人	1,254人	9,915人

(2) 岩見, 他 (1991.6) 「国際救援センター 項目別・レベル別到達目標 (案)」による国際救援センターではテキストとして「日本語の基礎」(財団法人 海外技術者研修協会)を使用しているが、学習者の日本語学習能力に多様性があるので、到達目標を学習者に合わせて設定し、各目標毎にカリキュラム作成を行い授業の進度を調整している。その為に、一応の目安として明らかにされたのが下記の表である。

レベルの目安

【日本語の基礎】 との対応	読む書く力	聞く力	話す力
D 基礎20課終了	平仮名、片仮名を個別に認識できる。	単語、表現レベルでのみ理解することができる。	単語、表現レベルでの発話のみ可能。文を組み立てて話すことができない。
C 基礎30課終了	単語、文のまとまった単位で音を文字に置き換えることができる。	構造的に分析して文レベルで理解することができる。	文を組み立てて話すことができる。
B 基礎40課終了	漢字力不足のために、限られた範囲でのみ読み書きをすることができる。	やや複雑な文や、位相の異なる文を理解することができる。	やや複雑な文を組み立てて話すことができる。
A 基礎50課終了	辞書等で補うことにより、日常に必要な範囲の読み書きをすることができる。	実社会の日本語を聞いて、自分が分からない部分を認識し、それを補うことができる。	不自然な表現はあっても、生活場面に一通り対応することができる。
S 基礎および中級 上級教材終了	日本人社会でほとんど言語的な不自由を感じることがない。		

(3) 「日本語テキスト 日本の生活」(財団法人 アジア社会福祉教育財団難民事業本部、1986)

参考文献

1. 岩見宮子・山本紀美子・関口明子・安達幸子 (1993) 『日本に定住したインドシナ難民の母語の保持と喪失に関する調査研究』国際日本語普及協会
2. 佐藤裕美・他 (1993) 『インドシナ難民の定住状況調査報告』(財) アジア福祉教育財団難民事業本部
3. 清水訓夫 (1995) 「難民救援事業の現状」『愛』19:26-37 アジア福祉教育財団
4. 末永俊郎編 (1987) 『社会心理学研究入門』東京大学出版会
5. 田中宏 (1991) 『在日外国人—法の壁、心の溝—』岩波新書
6. 日向茂男・日比谷潤子 (1988) 『談話の構造』荒竹出版

7. 平城真規子 (1994) 「カリキュラム開発のための状況分析調査—「帰国婦人コース」開設に向けて」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』2:48-69
8. 西尾珪子 (1988) 「一姫路・大和定住促進センターおよび国際救援センターにおける—インドシナ難民に対する日本語教育事情」『日本語教育』65:95-108
9. 宮崎茂子・岩見宮子 (1988) 「多様な学習者に対するカリキュラム作成の留意点と実例」『日本語教育』66:63-75
10. メイナード, 泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
11. 吉田弥寿夫・湯川純幸 (1983) 「インドシナ難民に対する日本語教育」『言語生活』376:44-54